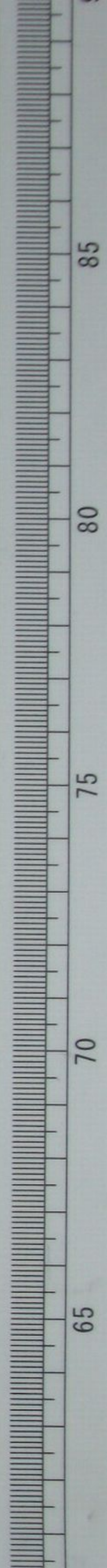




芥子園畫傳  
 上

伊地知文庫  
 文庫20  
 147  
 1













たれどり〜火おのり物よ結ゆんてののほのほの  
云集の古今集よとんてたの光よとれく  
食とゆるもとせむに〜り筆の出さぬく  
の〜らよを伝うめておぬ酒を物とんてたり  
志ふの道と中流に後より若くふ志ぬ物とか  
甲持とるもされが志ふ木れたるよぬくまにぬれ  
ま〜のよにたり物とぬん又おれたる〜中流よ  
む志れく〜り物〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
お〜に物や〜んお人の後物〜り〜り〜り〜り〜り  
代よぬら〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

とほく〜して〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜りの〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
ひとよは流〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
の〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
お〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
と源の合音と冷泉の黄門よ〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
初めの道とせむ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

11

11











しるは乃とらまきしあはれ大なる 因河

舟 行らるる舟なる

新のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 十佛

行 舟のきこふとあつとあつと

いふまきしとらまきし

ららめれ花とあつとあつと 良河

ひとよはつとあつとあつと

ふたごらもて人こらとかり

と川乃舟はあつとあつと 救済

るはつとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

てあつとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

透然わらわつとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと

舟のきこふとあつとあつと 舟のきこふとあつとあつと































風うさかぶる河の夕雲の夜を夏の手でぬき  
天川秋の一夜に雲をたぐひ麻のねを鳴しん 日  
いふれ名寄 ちるすにいとぬきす 同夜白

下りてららるるすーる宮井くれ 救済

そらぬれも月のこほしをく 用阿

凡秀白かしての奇き寄はるるる長し され茶

とや侍へふあれと秀白よかれど凡俗なる

れはーとねんが別霜月るるべー又さう人の

侍のうはくーくすれはよをさるるれを神と堂上

のやりにや合さるるのうは採用りまらるる

くや大ひひもれぬんがびーくやゆんまこ

よのなをべーおとにふ信の率れをあらぬ

し。されども愛とあせとまのれが人の白の

ちく我ちのーとつさぬやーのぬり侍や定家

卿に登りーふ無文たりは秀寄と四段なる文

り阿さぬめとやさるぬくぬくぬくぬく

ゆりまうに甲のむらぬかー古人の奇れ寄

さるは多ぬえゆり。生ぬとぬは天徳骨とて

十おとりのるたをべー水結の物子瑠璃とり

きるやうにとりり。是のさびく清れと也。



みすのわあふあとしけきほやういといひて  
とこーのびら也。大内裏大極殿の宮座は独  
ても。とねなういとよほぬー。大なる討に座  
をせざくらいらいさき討にたみの中ありあわ  
やうよ。淨苑淨眼の神愛れとくとととり。  
詩あり賈島の座せり。皇徳のさびーとつるり。  
思ふねりもらた奇い。親其供奉の目も涙み  
いさびーとつるり  
まはつるやうに侍ー心十らつたらりの骨に  
まはつるやうに侍ー心十らつたらりの骨に  
えんたうしことくれくえ侍り。さうやうこの人  
の再ありい侍と志りぬ。我奇のよこー海  
まはつるやうに侍り。後成の中あり  
とねいあーくまはつるやうに侍り。母の奇と  
老いさうくさる侍り。我奇のよこー海  
らりぬ。それとは物給へーす。我のくれと  
たうく。圓のさうあり。母の天竺と座をえり

おとわりのさうーまあささト侍ー程よ。世に  
まはつるやうに侍ー心十らつたらりの骨に  
えんたうしことくれくえ侍り。さうやうこの人  
の再ありい侍と志りぬ。我奇のよこー海  
まはつるやうに侍り。後成の中あり  
とねいあーくまはつるやうに侍り。母の奇と  
老いさうくさる侍り。我奇のよこー海  
らりぬ。それとは物給へーす。我のくれと  
たうく。圓のさうあり。母の天竺と座をえり



手言一  
已母のあしやまきし毎いし。された八十ら  
ゆ今よもしまれづらりうあしとあふらうと  
とかん物まらわのあしとくしとくしとくしと  
はのりゆりせしう人まらわしとて像とあしと  
あつとくしとくしとくしとくしとくしとくしと  
うしてあしとくしとくしとくしとくしとくしと  
よかり侍いし。  
洲乃いそ常速懐と心洞の音とて哀ありま  
あくとくしとくしとくしとくしとくしとくしと  
乃つぬと屋つしけとくしとくしとくしとくしと

よとすしめゆらよ。適わぬは一能よとくしとくしと  
ふきり名よめでし。世万代鶴龜者とあしと  
ひかどひあしとくしとくしとくしとくしとくしと  
てつしゆらう人う音とせ。飛う人う子年と海んあしと  
さう今白のちと海へあしとくしとくしとくしとくしと  
ゆしひるしひるしひるしひるしひるしひるしひ  
あしへるしゆらう人う速懐とあしとくしとくしと  
詩あり杜子義一せうとくしとくしとくしとくしと  
け経とあしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと  
あしとあしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと







人を海ぬきの園屋の板店煮あし飯のきも秋の風  
けきくの二字の昔より玄妙不可説のきりよ作とか  
や。伎しこきお高も極よとれうまうしんじ二字  
伎流胸よまげりこまよあまおろろしやオヤ作  
けひしこさていぬまおとれまき作とれ境之極能  
り人れがいのとてけて胸よりお教ゆよとれまう  
は里目し書作りや。お徳の人お白のちのこり  
ぬりゆし所耐なるらん那わたりて耳いあき  
ゆし達者よのこなる人あし一り神とことあ  
て境のまきし〜ゆ〜ま〜ひよとれまやらん

先達の書作〜は史官いづまの神とこととれらん  
とこと〜あれ人よはし作りぬひとのこま  
り〜まを流り〜そあ〜れらとあやゆらん  
教みい周して法せどか人の法して不用といふ伯  
夷叔父を聖の法也。伊尹ハ聖れわ之孔子しを時  
なりやといふれ。佛とてそ兩足尊とす作也。三業  
乃公いけなすらん〜  
州道先達と教く字毎記よりや。度くれ人の  
詞とく〜ま〜て作らん。とらうなるるありこ  
と教く新と志道とこととらうけらん人の書

仏書上

十八







手言一  
家少のきより如く。仁者の能人ともみひよ  
く人とあへんするところか。たまたま如く。又  
み期らりて白牙琴のよもゆのとらり。そ人  
と見んとさりて。そ友と見よ。そ父と見んとさり  
そ子と見よと。り。既して。和し。詞たれ。夫  
も。善友親近と。并一とす。也。因縁中の由よ  
自性か。し。と。らり

人の中。竹の音。連歌。い。る。み。体。あ。や。し。れ。ま。び。の。か  
さ。え。び。も。の。耳。み。向。白。足。作。らん。こ。を。た。ま。れ  
し。る。い。づ。い。づ。さ。ら。た。り。は。さ。し。わ。さ。く。さ。う。ひ。よ

入らぬ人の知。さ。よ。あ。ず。不。法。無。知。の。事。も。親。句  
平。懐。神。か。む。い。さ。し。こ。を。作。り。め。等。し。う。幽。玄。の。い  
と。の。た。が。ら。ず。の。人。の。覚。り。知。る。や。作。ら。ざ。う。ん  
定。家。の。歌。の。海。の。勝。月。夜。は。仙。女。乃。向。歌。ら。り。よ。歌  
き。て。ま。し。う。せ。も。う。ん。自。ひ。如。く。か。む。の。か。と。れ。ん。  
人。丸。未。人。の。事。も。只。そ。人。の。物。よ。の。こ。見。作。け。り。や。  
た。も。ま。は。人。の。め。う。の。玄。妙。不。可。説。奇。な。る。べ。し。杜。子  
義。の。詩。も。も。あ。る。人。の。し。と。あ。る。と。や。ん。佛。の。法  
と。と。立。子。の。上。慢。の。造。と。も。た。く。立。作。れ。り。  
應。身。報。身。も。く。い。と。よ。ひ。法。者。に。い。う。て。終。く



ぬべし世よかべてかぬめ子きこ徳志と才さい乃人ひとと  
 侍しらんや又また死し人ひとよはなれありぞらるるあはは  
 ちてとやされぬりよ。是こゝ達たつ者ものあし。大おほいひ世人よじん  
 時ときめをておる他ほか志しともしを侍しめられぬり  
 何なにうまふ人ひとの登あがれしんもかた死しぬべし人ひと  
 あくも所ところ仁にんめをこを能よくくするよてい侍し者もの  
 あれ人ひとのしもされぬる昔むかしよりたぬし  
 ぞだの進すす人ひとよきれぬれとらぬれ人ひととあは  
 ぶとらぬれ下くだもわらり。孔こうみく何なによあはすこらう不ふ  
 女にょ卿けい人の善ぜん者もの好このむも不善ふぜん志し無むく佛ぶつ乃の酒しゆ名なとよ

し三さん億億乃の人ひとのきふべと云い。洞くわう底てい乃の松しょう入いひより老らいひた  
 たりををといふにこそうひよ入い侍しらん。人ひと乃の侍し  
 一い流りゅう法ぽう乃の入いてわら源げんとめめんあしひるま  
 ちびく表あひ少せうきまふととらんにはいひかたのせ  
 有ある物ものとぬのこをぬく乃の又またよふ侍しる實じつとたし  
 ちかたりあふよかた人ひとの中なかよりたがらけあし  
 ありごとくこそ侍し者もの。佛ぶつもあふとくして独ひとりの深ふか  
 入い六むとせり侍しりよのいりてにまれ集あつまり侍しり。  
 詩しみし秀しう乃の閑けん家け人ひとのぬらいついばとらうと人ひと  
 閑けん居い出しゅ柄へい乃の種しゆこそなくと常つねにいと侍して



















親おや一ひと傳つた後のちあとききしむのううきりなり。

先達せんたつの傳つた一ひと曉あきの工たく吏しなりし傳つたのあ

がれ公こうてよし一ひと字じとよとてくくの折をり越こ遠とほ痛いた

廻ま又また我われのううの病びやうの人の付つ傳つたんまで完くわん快がい

ああく百ひやく顔がんとけりてて能あた後のちとああん人のああと

一ひと句くのううのとききああん書しよのううていいうて。

小せう井けい道どう風ふうががの流ながれもも到いた極ごくの流ながれ世よは知し人ひとなりし

一ひとととり。佛ぶつ法ぽうの教きやうを融ゆうよよて万まん象ざう

と捨すてざりざりたたいいささととりり分ぶん別べつのああららべべ。

凡ばん俗じやくなるなる句くととりりああららるる傳つたてて傳つたやん

婆ばととのの凡ばん俗じやく傳つたべべ一ひと傳つたれ凡ばん俗じやくののききととりり屋やす。

心こころ乃の凡ばん俗じやくののききととりりやや傳つたらん。

松まつううんん古このの屋やとといいう。

是こゝのの風ふうとと月つき見みんんああららわわああらら。

是こゝのの病びやうのの人ひとのの心こころ乃の松まつううんんととりりてて愛あいをを傳つたて

やや傳つたらんらんのの人ひとのの心こころ乃の松まつううんんととりりてて愛あいをを傳つたて

月つきととああららわわるるん

是こゝのの風ふうとと月つき見みんんああららわわああらら。

ひとひとのの心こころ乃の松まつううんんととりりてて愛あいをを傳つたて

是こゝのの風ふうとと月つき見みんんああららわわああらら。

是こゝのの風ふうとと月つき見みんんああららわわああらら。



七葉なごの二葉に紫雲むらさきすけりてあえなる  
こそえんよ侍よ。まににまににいふはしるくはむし  
と下しげ地

舟よの回まわりて人ひとの心こころとちうすたうりて  
りよちとちやままあうりていふ侍さむらいや。先達せんたつの  
たを侍さむらい中ちゆう中ちゆういひまじりて河か法はふ首くびづりよ  
や。この中ちゆうの一人ひとりなどいふはくは一字いち二字にじ入  
てとるハト侍さむらいと人ひとまよ我わが物もの好このまされつら  
し。ゆりき人ひとの志こころをわりて云いふしるくも。  
ゆりかまうりてまゆぐり他たも侍さむらい也なりと使つかひす。

古人こじんの火ひよのましめ侍さむらいと人ひと首家かみに末すえ八はち松しょうや  
海うみととちとれけるよ。いふとちうねて後のち雅みやび經きやうの是  
乃なほ中ちゆうとちとちとるはとちとるは乃なほ身み仙せん  
と下しげれす。とて難なんとちひまれと人ひと  
者ものおめでと花はなみゆりす。あゝあゝ  
らおと人ひととちとちとるはとちとるは

み云  
花はなといふとちとちとるはとちとるは  
梅うめ乃なほ花はなわのりしとちとちとるは  
他たといふとちとちとるはとちとるは



雲妙乃がそよほきさあ人のちうーなる約々。  
唯人のおといひつぎきあかたぐー

都としてほきさあまれのち雷うれ

ひとあさおのまれ乃ち雷うれ

ひかぞおれーはしり合作ーききあうり人のか

とけすまの作者に作ねば中しくおつーおの

及作りうくごりぬすのあきおれおきー也

あまのちのあまのちとて作よさうひよ入ひさるるおん

作りあまのちのあまのちとて作よさうひよ入ひさるるおん

あまのちのあまのちとて作よさうひよ入ひさるるおん

本坂きあやあははのあまのちのあまのち

ひおいさくあまのちのあまのちのあまのち

とてあまのちのあまのちのあまのち

まりまのあまのちのあまのちのあまのち

まて本坂きあまのちのあまのち

夏草やまのちのあまのち

あまのちのあまのちのあまのち

まのちのあまのちのあまのち

あまのちのあまのちのあまのち

あまのちのあまのちのあまのち



かんじのにもたう海をよす也

ありごとせよ夫が志の如く花の如

錦の如くは秋の月を

紫の如くは乃の未だ記宛て

又奇に花の如くとい海のこと万葉集より

花の如くは乃の未だ記宛て

花の如くは乃の未だ記宛て

かまへりて

月夜をみる乃の如く

花の如くは乃の未だ記宛て

かろの如くは乃の未だ記宛て

親の如くは乃の未だ記宛て

よの如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て

とる也。奇の如くは乃の未だ記宛て







月乃る侍指扇の雪乃約ゆけ

松林

鳥——さる田瓜まきい久とたり

是月乃る侍指扇の雪乃約ゆけ

昔何

あゆむとけても雪はまにあり

ちりまう侍指扇の雪乃約ゆけ

順覚

此二句の前の下れがよ曲の公あるゆへに侍指扇の雪乃約ゆけ

歌うけ——ていひのそ——て前のよゆりつら

而歌乃る候くからてそう好いされ

花見——ふ乃ゆめくれ此雲 良何

お——ははちやのちる葉の宿

いぞ入るぞ月とてそん終 伝照

此二句の前の下れがよ曲の公ありて。よゆりつら

下句は篇序歌と歌——ていひのそ——ていひのそ

也。連寄は必上句は云ひ——ていひのそ。下句はゆげ也。

下句はいひのそとていひのそとていひのそとていひのそ

き物と見くそり。たぬくよいひのそとていひのそ

ハ感懐秀造たるべ——とつり。寄りよふ回と二示

よい——とていひのそ。序乃判。屋とあそり判

とてき物也。是と覚悟なくハ。秀造とていひのそ

とていひのそとていひのそとていひのそとていひのそ

とていひのそとていひのそとていひのそとていひのそ

とていひのそとていひのそとていひのそとていひのそ

とていひのそとていひのそとていひのそとていひのそ







祢乃いざれりひくひんもけり

田校り一足の目いざわう一め縄 伝照

うはつ夢のわすくこそとあ

後よどの荷うれの頼根うけの心 周阿

いよりあしうらまにきほに

入江のれいでうきを中

紫のぬぐひあつていもはあけず

尋ら六義とて六の深とくもらやま

とわらあしうらまわ。先達語ゆ

六義のわらうらまはあまをうて大自

歌をへ

風 うへ尋乃公

名をぬく一志のうへ好一節公

二條大岡橋と郭よそ入て隣栢志替る女

を。およろしくかへり成れと風乃かぬへ

賦 のそへ尋れぬ

お侍目ハ家のり家よ成りたり 叔妹

是ハ物ごとくは成らがりて道にさぬへ

こまやのたかるとは侍候乃かぬへ

此の あそくへ尋れぬ

八十一

七三



下もくから地をにま〜る井井の目

数の字と藝は何何〜ておぞ〜る何〜

奥 五と人哥乃心

又月白の何何の松風谷の何何

色ハ何何よ何何つ何何る何何〜

る何何と何何の奥何何の何何〜

雅 唯 何と何乃心

たの何何れれ秋の何何から何何り

そ〜らよ何何ひ何何る何何也。何何何ら〜

く何何れ飛乃が何何り

頌 何と何乃心

花何何み何何げ何何乃何何き何何り何何れ 成何

や何何祝何〜る何何の何何〜 頌何何の何何也。古今集何何る

席何何の小何何の頌何何乃何何に何何律何何の何何〜

のり。け何何小何何を何何返何よ何何乃何何人何何の何何書何〜る何何詞何と何〜

里何何何り。何何何は何何後何義何〜る何何心何何何と何〜

と何何〜り。何何何は何何何何何何何何也。何何何も何何何と何〜

〜て何何何何何の何何志何何〜 何何何り

歌何〜は何何〜 何何何合何と何〜 何何何者何何の何何名何何何〜

高何何何よ何何何〜り何何何何人何何よ何何何〜り何何何

ら何何何〜り何何何何志何何何也。何何何何〜り何何何











氷より雪の川乃秋の月 梵河  
 宵の八あはつと木火木焚くれ 日  
 その年木火のい下。海底は東乃は場は向  
 おいそふしゆく初し屋さくゆりれ  
 ちけ尻蕨りかのあを夕月秋海底  
 凡ゆるく花かうさきあさる日  
 此じふすげ少とこそね行れお向  
 松の繁いあさくさるれ志くれ日  
 其後永享のいせよ志くれぬる宗御法所  
 智恵がどぬ。皮お徳若和尚乃下に久く

侍く高入たききさるるよやまはより進み  
 為漸段まるとおさすやこらけ侍り  
 表はしく雷雪にさすびとくれ 宗御  
 りからせぬ松とう風枯れ日  
 新松乃雪れ梅々何紙繁くれ 智恵  
 長月やふまれおのさるくれ 日  
 皮お身あらして後げた又さくく如侍もねん  
 冬徳心若からりおさるし徳侍まびけた  
 又うきくれぬらこそりしれはなりのあ  
 与人お侍ともいづ進乃光とつと能乃まらよん











扇う縁う海に流るる月影人

良河

月影ながくあはれ葉の戸の中  
はらうあはれとれはるす海にうき

信悠

川乃もむみよたぐのてし海  
見よし海に夏う海にその連極

十松

有公の句

またさういふ心むいせし海

秋秋

りくしては川とついでに海に  
さしりかきあはるるあはれやせん

わの海にせし秋もゆふくれ

高向

ぬーしききね舟れは川

秋秋

あーらひ本はのさうりに目か  
人よきし海に春あしこみら

ゆうら海に本はのさうり  
ねやにうら海にすしかならん

日

さし火のわのきえかきる鬼とて

日

濃の句

あやめかりて扇と好らん

伝悠

玉をれのこがめにさし海花乃枝  
そめとせぬしはらひてそめ海



志のつらかりはうめく見や海木

七年より人乃すう少なき

このこよひのひとの乃舟をく

舟れらうもく老よ言れれ

筆れう言ひのあよおれまき

いばらり入心申の月

ととつれさのまらるる

霰白

月こそじりれあかりから

心然中や心のまがら吹ら

志

救

昔

救

心

あつぬいさのこいさね松乃流

大言やいかりの勢とどげらん

いびくまのいさうう浪乃と

臨かくひたのいつたあけぬらん

泉すいさのまらるる

徑去乃うらゆあよ月更く

酒屋ね命うら花とさるる

かまねくうらうのまは出の書

白白

あつぬいさのこいさね松乃流

志

救

信

日

良



見ざる子乃きまよむを色ゆり控く

枯乃とせごうきくきこゆれ

秋さじき筆乃腐り人すんく

本す忠よの心か煉乃きく腐

山のれ松のせむら月いつく

いりさやうこそ立るりまれ

老ぬきバいけひまろく公あく

人の救しそあましく思てすれ

松本乃りされ乃總よぶぬき

奉て宛白

人よさふきんたぶあま

花乃故本の心もあつたま乃景

海より一なる里よこそ舟

あぬれく景う海殿よゆきついで

心とねと帯や蘇もあぬん

床乃ねあり海ゆみぐれ水や海

くゆりあつ海り飛やまぬん

身と控り采の腐乃知ろり

去ぬよたれハ浦すに塩やうて

舟よぬまれ海あれしやろり

私語上

三三三



一節のか

海乃えとらうぞのらねみ井  
信照

人かひおのらねえらうぞ  
信照

平井一花水母ははるる  
十法

あふぞとらひ一命れり松  
相映

あふぞとらひ一命れり松

入のらあふぞとらひ松の中  
日

寫古のか

雷乃あつめくふとく  
花見

富士乃根と人のころにゆりて  
昔阿

いほりり行日き年乃阿とる  
言阿

三がぬのむ社乃西名のかりの  
流港



きどいづつにににとあはれん  
寺らうきあすのれ里に何あづ  
十弘

強力の句

ゆーわのむより見ゆるづき  
あまうげ祚代久一死交り  
叔洪

いのらぢいハまづあづり  
老のなかりあづりみとらそ  
十弘

うねてらふあはれり  
何もあづき月つとま  
信照

引夫うあはれおあふあはる

ゆーあつ秋の田とら上あ  
周何

霜とたうくあはれこり目あ  
叔洪

位者小社こそ登照  
り業に南らせく  
はららしたははらあはれ

らめあはれのあはる



私語上終

四十四終



